

説明文

超高齢社会になってきている日本において、消化器癌の患者様も75歳以上の高齢者が多くなってきています。このため消化器癌手術患者にしめる高齢者の割合も増加してきています。ただ高齢になると筋肉量が減少して筋力低下や、身体機能低下をきたした状態になります。そのような状態になると手術における合併症は増加し、生存率も若年者と比較すると悪くなります。

胃癌、大腸癌などの消化器癌の手術における合併症の頻度や生存率は、多くは癌の進行度によって規定されます。最近術前の栄養状態、腹腔内脂肪量や骨格筋量なども、手術における合併症の頻度や生存率に関与することが報告されています。しかしこれまでのほとんどの研究では単一の体構成成分の影響のみが調査されています。腹腔内脂肪量、骨格筋量、筋肉の質などについては正常値も決まったものはありません。そこで術前におこなった身長、体重、血液生化学検査：総蛋白、アルブミン、コレステロール、CT検査画像から計算した筋肉量や腹腔内脂肪量、CT画像の筋肉のCT値から筋肉の質を推定し、それらの手術における合併症の頻度や生命予後との関連を調査したいと考えています。特に腹腔内脂肪量の増加と骨格筋量減少を併せ持つ状態と、手術における合併症の頻度や生命予後との関連について注目しています。

新たな検査はありません。統計 data として消化器がん術前における体構成成分が術後合併症や生存率に与える影響を検討し、この統計 data のみを公表します。個人情報取り扱いには当院の規約にのっとり慎重に対処します。個人を特定できる個々の data を公表することはありません。今後の消化器癌の術前栄養療法や術前運動療法を検討する重要な資料になると考えています。

今回の研究による直接の利益、不利益はないと思われます。これら調査を「消化器がん術前における体構成成分が術後合併症や生存率に与える影響」の研究 data として使用させていただけるようにご理解と協力をお願いします。